

エンドレス・レイン

煌 滯

第一章

西の空に、夕焼けの残光がうつすらと射していた。国道7号線の車のライトも、次第に、眩しさを増していた。信号が青に変わると、N高校の女学生が、足早に、横断歩道を、海の方へ渡った。

……辺りには、宵闇が迫っていた。

蚺満寺の松の梢には、既に、所処に色濃い闇が宿っている。何処からか、鳥の鳴き声がして、小さく羽音がした。

蚺満寺手前のコンビニの駐車場には、すこし前、国道から入ってきた白の軽乗用車があった。その車は、コンビニから最も遠い線路側に、エンジンを掛けたまま停車して、既に、二十分が過ぎようとしていた。

辺りは、もうすっかり暗くなっていた。

すると、突如、何処からか、ピーと辺りの闇を劈くような警笛が鳴り響いた。

蚺満寺周辺が、急に、ぱつと明るくなった。象潟駅から発車した下りの三両編成の電車が、ガタコトとゆつくりと蚺満寺の前を通り過ぎようとしていた。踏み切りの音も、遠くで鳴っている。

やがて、次第に小さくなる最後尾の車両の窓明かりが、夜の闇に、すつと消えると、駐車場の暗がりから、微かに、その車のエンジンを切る音がした。つづいてドアが開く音。そこには、白っぽい服装の長い髪を真ん中から分けた長身の女が、立っていた。

女は、辺りを窺うように、ちらつと、コンビニを一瞥してから、ドアを閉め、キーを差し込んでロックすると、駐車場の隣の空地に、スーッと入っていった。

空地には、三年前の市長選挙のとき、ジャリ石が敷かれ、今は、数日前に草刈機で刈られた雑草が、無造作に倒れていた。

女は、草が、靴に引っ掛って歩きづらいつつ思った。空地の暗闇にも、女は、暫し躊躇した。この空地を通り抜けるには、約三十メートル歩かないといけなかった。

この時、女の脳裏には、ここから踝をかえして、コンビニの駐車場を通り、国道の歩道に回ることも考えた。が、あの女の店の駐車場には、黄色の鎖が張られてあった。

その鎖を跨いだり、潜ったりすることは、なんとなく屈辱的に思えた。それに、誰かに見られるかもしれないとも考えた。

女は、また空地を、ゆつくり数メートル進んだ。ジャリ石を踏む音が、女の耳に鋭く反響した。すこし暗闇に目が慣れた頃、なにやら草叢で、ざわざわと不気味な音がした。

女の神経が、ゾワツとする間もなく、突如、無数の鳥が、おぞましい泣き声とともに、空地から一斉に飛び去った。女は、悲鳴を上げ、地面に座り込んだ。女は、暫くの間、身動きしなかった。

ようやく、女は、少しふらつきながら立ち上がると、何やら、ぶつぶつと独言を言っていて、また、一歩一歩ゆつくりと歩を進めた。

第二章 久美の独白

気味悪い、気味悪い。心臓が、一瞬止まるかと思った。一体、あの鳥の集団はなんだろう。この空地で、一斉に気配を殺して、何をしていたのだろう。鳥が飛び去るとき、暗闇が、さらに真っ黒になった。

それにしても、なんて鳥は、気味が悪いのだろう。今の鳥の鳴き声で、私が此処にいることを、誰かに見られたのだろうか？

後ろを振り返っても、コンビニの入口の前には、客の車が、四五台止まっているが、人の姿が見えない。

ちよつと前に、猫を紐で繋いだ男が、歩道に立っていたが、それも今は見えない。

いや、何故、私は、そんなことを気にするのだろう。これでは、まるで、私は、これから何か犯罪でも行おうとしているみたいではないか。違う、違う。私は、ただ真実を知りたいだけ。娘の愛妃をこの胸に抱きたいだけ。

《女は、空き地の大岩に、弱弱しく腰掛けた。そうして、女の白い影が、小さくなって、闇の中に、携帯電話の青い光が、ぼうと浮かび上がった。》

……女は、X.JAPANのEndless Rainの曲を聴いていた》

ああ、九十九島に小さく光る青い灯が、なぜか悲しげにみえる。

何故にこうも、あの青い灯が、私の心を物悲しくさせるのだろうか。この物悲しさは、確かに以前にも身近にあったような気がする。

……そう、あれは、京都に住んでいた頃、学生だった私は、仁和寺の裏山を、よく散歩した。聾学校を過ぎると、そこには、八十八ヶ所霊場があった。

坂を上ると、時として、誰かがトランペットを吹いていたり、バイオリンを弾いていた。山の小道から、向こうの山の霊場を見ると、西日を浴びて、美しい黄金色に輝く番礼所があった。私は、それを眺めるのが大好きだった。そして、いつしか、その番礼所に、物悲しい憧れを抱くようになった。と同時に、それが未来の自分の何かを象徴していると信じるようになっていた。もしかすると、自分は、きっと薄命なのではないかと、ひとり悲観して泣いたこともあった。

いつも、山の小道に行く度に、その番礼所は、まるで私を手招きして呼んでいるかのように、神々しく光輝いていた。

しかし、その反面、そこには、絶対行つてはいけないと、自分に強く言い聞かせてもいた。或るとき、その誘惑に負けて、ついに、そこに行つてみた。が、そこにあったものは、黄金色に纏った番礼所ではなく、汚く朽ちかけた番礼所だった。

脇の杭には、『蝮に注意！』と書かれてある。

西日に、いつも反射していたものは、屋根の剥げかかった板金だった。

今となれば、その頃、自分がよく逆打ちした小道やその番礼所の在り処は、記憶に定かではない。ただ、その番礼所が西日に反射した光だけが、今でも、はっきり目に焼きついている。

《曲は、とつくに終わっていた。

女は、立ち上がって、また歩を進めた。数メートル進むと、遠い外灯で、あの女の家

ドアが、暗闇にぼんやりと見えた。桜の枝に注意して、店の駐車場に入った》

鳥が一羽、ドアの前にいる。さっきの鳥の集団から、置いてきぼりをくった鳥みたいだ。それとも、怪我をしているのだろうか？

何故か、じつと身動きしないでドアの前に蹲っているが、外灯の下で、はっきりと、私を、じつと凝視しているのがわかる。

《女は、鳥に、石を投げた。鳥は、ひと泣きした。もう一度、石を投げると、タイルにバウンドして、鳥の目に当たった。鳥は、濁音の穢い声を発して飛び去った》

昨日の夕暮れといい、今夜の鳥といい、気味悪いことが続く。いや、昨日は、幸運な偶然

の目撃があった。あれが、すべてだった。やはり、あの女は、自転車に乗れた。

それも、早く。嘘つき女。昔から、あの女は、平気で、よく嘘をついた。

しかし、これで、愛妃の事件の映像が、パノラマ写真を繋げたように、私の脳裏に鮮明に繋がって映し出された。

昨日の午後、私は、警察署の前を、車で通り過ぎようとしていた。

そうしたら、あの女が、プラタナスの街路樹の陰から、若い女性の日傘にぶつかりながらも、尋常でない表情をして、自転車で凄い勢いで飛び出してきた。

その光景を、不意にみたとき、私は、あまりの驚きで頭皮がズルリと動いたくらいだった。次の瞬間、私の疑惑は、ついに確信に変わり、憎悪が沸きあがった。

『あれは、やはりエリカが犯人だった。私の大切な娘を、エリカが殺した』

あの女が、私が、精一杯の愛情を注いで育てた十二歳の娘を、非情にも、神隠しのように殺したのだと。

あの女には、私の血を吐くような悲しみはわからない。あれは、一度も、妊娠すらしたことがない残忍な修羅の女。

それに、エリカは、若い頃に、一人の男を殺しているのだ。昔、笑いながら話していた。あの時は、冗談だと思ったが、違う。あれは、事実だった。

ああ、今思えば、昨日のあの瞬間は、なんてついていたのだろう。全ての謎が一本の線となって、あの女の子じみたトリックが、その情景すら鮮明に、脳裏に映し出された。

そのあと、すぐ、私の車は、あの女の喫茶店の駐車場に入った。国道端にある営業中の点滅ライトは、あの女がすぐ帰ってくることを教えていた。

店に入って、私は、真っ先にレジ付近から、柱の釘に、いつもぶら下がっている古めかしい玄関の鍵を手にした。

しかし、あの女は、もうすぐ、店に帰ってくる。それから、三十分後、私は、合鍵を造り終えて、その借りた鍵を、店の玄関先に咲いている松葉菊の傍にある煉瓦の上に置いた。

そうして、また、何食わぬ顔で、店に入った。

女は、ドアの鈴の音で、奥から暖簾を潜って現れた。その時のあの女のどこか憔悴しきった顔。声も元気がない。

そのとき、私は、心の中で、あの女を、確かに殺していた。

コーヒーを飲んでいると、

「玄関の鍵を失くした」と言う。

それから、エリカの愚痴を、一時間くらい黙って聞いていた。

エリカは、力なく

「無用心だから、明日は、名古屋の妹の結婚式へは、行かない」と言う。

『しかし、それは、困る。だから、さつき、玄関前の煉瓦の上に鍵を置いたのよ』
と、心の中で笑った。

『私が帰ってから、鍵を見つけなさい。見つけたときが、あなたの命日の前々日になるのよ。』

店を出ようとしたとき、偶然、玄関先で、あの男とすれ違った。男は、驚いた様子で振り返って、私に挨拶をした。

そのとき、私は、西の空のぶきみな赤い光に驚いた。空は、真っ赤な夕焼けが、凄まじく、気味が悪いくらいだった。蚬満寺に、夕日影が射して、松の梢が、朱色に燃えているようだった。足元を見ると、松葉菊の花は、いつの間にか閉じていて、鍵がはつきりみえた。

明日になれば、また、花は開く。夜明け頃に眼を覚ますエリカは、きつと、鍵を見つけた。馬鹿な女。やはり、あの女は、翌朝、鍵を見つけて私に電話をかけてきた。

「それじゃあ、予定どおり、今日、秋田空港へ送っていくわ」と、私は言った。

空港へ送って行く車中、あの女は、子供みたいに、えびみりん焼きのお菓子を、パキンと音を立てて割って、そして割った箇所を合わせて、また離して美味しそうにパクパクと食べた。そうして、高速道路の橋の上で、不意に顔をぐるりとこっちに向け、神妙な顔をして言った。

「近頃、また小学校付近に、変質者が出没しているそうね。黒いミニバンから手を出して、女子の二の腕を掴んだそうよ」

空港へ着くと、私は、搭乗出口から、あの女の姿が消えるまで柱の陰からみていた。

搭乗口の女性職員が、二言三言声を交わして、持ち場を離れたとき、私は、確信した。あの女は、間違いなく、飛行機に乗ったと。

私は、空港近くの公園から、フライトが遅れた飛行機の離陸を眺めることができた。

滑走路に、赤と緑の誘導灯が、点灯して空港の夕暮れの景色を美しくした。

薄明かりの青空に、大きな星が瞬きはじめた。私は、東屋に佇んで、飛行機の離陸を待っていた。下から吹き上げる風が、冷たく、体が冷えてしまった。飛行機が離陸すると、白い機体は、暗くなった空に舞い上がって、やがて爆音もなく、ぼやけるように消えた。

エリカが、あの飛行機に乗っていると考えたら嬉しかった。これから、あの女の店に行つて、私の愛妃に会うことができると喜んだ。

空港から高速道路を運転しているとき、ひどい悪寒がした。さらに、運の悪いことに、性

質の悪い大型トラックに煽られて、死ぬ思いまでした。空港から、このコンビニの駐車場まで辿り着くまで、こんなに運転が恐かったことはなかった。

……しかし、今は、この合鍵を鍵穴にさして右に回せば、ドアが開く。

今更、何を躊躇うのだろう。今日が、愛妃が失踪した日から、ちょうど一年、あの日から、あの女が犯人だと、直感的に解かっていたことではないか。

従妹のあの女は、幼い頃から、よく一緒に遊んだ。異常にプライドが高く、その自己中心的な本性と残忍な突発的激情は、誰よりも私が知っている。

子供の頃、二人で一緒に、足に擦り傷をつくりながら自転車乗りの練習をして、お互いよくやく乗れるようになって、抱き合って喜んだのに、愛妃が失踪したとき、刑事に、あの女は、自分は自転車に乗れないと平然と嘘をついた。子供の頃、自転車に乗る練習中に、転倒して大怪我をしてから、怖くて乗れなくなったと言った。家にあった自転車は、N高校の生徒が、駐車場に置いていったものだという。ハンドルがVの字のように立っていて、サドルも高く、到底、女には乗れないなどとも言っていた。嘘つき。昨日、慣れた運転捌きで、自慢の長い髪を地面と水平になるくらいスピードで、その自転車に乗っていたのをみたのよ。それに、子供の頃、自転車に乗って、大怪我などしたことはないはずよ。

……やはり、犯人は、あなたね。あのとき、愛妃の服を着て、帽子を被って、愛妃の自転車で、コンビニの駐車場を横切って、蚩満寺まで行った。

子供の頃からそうだった。エリカは、嘘をつくとき、きまって眼を剥いて、眼を左右にクリクリと動かして、大声で話す癖があった。刑事に、自転車に乗れないと言ったときも、その癖が出た。だから、あの瞬間から、私は、エリカを疑っていた。

あの女は、蚩満寺の公衆トイレで着替えをして、愛妃の服を、男子トイレの水洗用の水タンクに隠した。そして、愛妃のホワイトジーンズを、蚩満寺の駐車場の車のトランクに、わざと見えるように鉢めた。

二三日後、世間では、女兒失踪事件で大騒ぎになった。警察は、総動員して、各家々に変質者の目撃情報の聞き込みを始めた。

そして、疑わしい多摩ナンバーの赤のセダンの行方を追った。テレビ局のキャスターとスタッフは、蚩満寺に徐々に増え、二週間以上も、象潟に滞在して、全国版のお昼のニュース番組で、毎日放送していた。

驚いたことに、外国人の八卦見まで、象潟に来て大騒ぎだった。あの女の喫茶店は、連日、テレビ局関連や野次馬の客で溢れ、あの女は、何度も全国版のニュースに顔が出ていた。……犯人のくせに。

漸く、テレビ局のスタッフ達が帰って、蚩満寺周辺が元の静けさに戻ったある日、私は、

その事件が起きた時刻に、蚶満寺の線路に沿った農道を歩いていた。その農道は、エリカの店の裏に通じていた。

そのとき、コンビニの裏口の室外機の脇で、茶髪の若い女の店員が、ゴミ袋に隠れるように煙草をふかしているのがみえた。

私は、薄を搔き分けて行き、その店員に、その事件当日、この時間帯に、この農道を誰か通ったかと尋ねた。

店員は、事故があつた花火大会の日のことは、よく覚えていた。一人の変な農婦が、何も持たずに、せかせかと急いで歩いていたらと言つた。何故、変な農婦かと尋ねたら、その当時、コンビニの裏は、電動草刈機で草刈した直後で、農道の大きなジャリの石までよく見えたと言ふ。その農婦は、格好に不釣り合いなピンクのサンダルを履いて、ジャリ道は、かなり歩き難そうだったらしい。

農帽から、タテカールの毛束がみえて、ピアスがキラリと光つたという。紺のモンペにピンクのサンダルは、絶対に変ということだった。

あの女の染めてない自慢の長い黒髪、毎朝、時間をかけて、パープルカラーで作るタテカール。お気に入りのアラバスクのピアス。ラメ入りのピンクのチュールサンダル。

あの女は、すこし前かがみになって、足を開き加減にして、せかせかと歩く。

「こんな格好で歩いていた？」

店員は、驚いたように、

「そう、そうだわ」と言つた。

「口を開けて、笑いながら歩いていたら。白い歯が見えたとし、笑い声が、ここまではっきり聞こえたの。なんとなく、気味悪かったから、はっきり覚えていたの」

私は、気が動転するくらいに、あの女にたいする憎しみが沸騰するようだった。

店員は、いつの間にか、姿を消していた。

そこから線路に沿った農道を見ると、あの女の家近くにつれ、ススキが背丈ほどに生茂っていた。店員は、あの女が店の裏口に入るのを見ることはできない。

しかし、私の疑いは、この時点で、不動のものになっていた。

三年前、エリカは、自分が飼っていたマルチーズ犬のことで、こんな自慢話をする事があつた。

「メリーが死んで、二年経つけど、死んでから、すぐ、メリーをミイラにして地下室に保存していたの。脳や内臓を取って、ヤシ油で洗って、ナトロンを頭とお腹にたくさん入れて、皮膚と筋肉の間に松脂と香料と黒胡椒を縫いこんでね。眼の工夫が上手なの。それから、顔や手足の皮膚には蠟を塗つたのよ。それが、巧く蠟人形みたいにできたの。他にも、いろいろオリジナルの工夫があるのよ。今も、まるで生きているようにみえるの。」

メリーは、老衰で死んでしまったが、成程、あの女の悲しみ方は、尋常ではなく気の毒なくらいだった。が、あの犬を、ミイラにして、命日とお彼岸に、供養していたとは驚いたものだった。

その地下室には、一度入ったことがある。何年前か、エリカが、私に、メリーを見るよう執拗に頼むことがあった。

カウンター内のマットの陰に、その入口はあった。それは、少し小さめであったが、重そうな扉で、その地下の階段は、狭い踊り場がある急な階段だった。裸電球がひとつ、天井からぶら下がっていた。

八畳くらいの地下室は、通常の二倍の厚さのセメントで床と壁は造られていて、携帯電話の電波は、国道のすぐ側にもかかわらず圏外だと、エリカは、変に自慢した。

床と壁のセメントの地肌は、白く乾燥して湿気もなく、空気は、ひんやりとしていた。

いろんな物が、驚くくらい整然とおかれていたが、家庭の物置場ではなく、店専用の倉庫だった。四季にあった店内用のポスターがケースに入って、きちんと棚に並んでいた。

昔、よく店内で流していた65〜75年頃の洋盤のLP盤やEP盤。昔と変わらない店内のワインとパープルの色調のカーテンやテーブルクロスが、季節ごとに区分されて、綺麗に畳んでビニール袋に入れてある。隅には、かなり古そうなワインセラーが、静かに振動していた。

奇妙に思ったのは、正面の奥に頑丈そうなドアがあることだった。しかも、そのドアの取り付け方が、地下室に不自然なくらいに隙間もなく、しっかりしていた。

エリカは、重そうにそのドアを開けて、その小部屋から、観音開きの木箱を抱えて持ってきた。その木箱を開くと、ちょうどメリーの顔が、ドアアップで目に飛び込んできた。

私が、悲鳴を上げると、エリカは、不機嫌そうな顔をして私をみた。

メリーは、目に、ビー玉を埋められ、ミイラとは言えないような気持ち悪い顔をしていた。悪臭もした。私は、吐きそうになって、一階へ駆け上がった。

……きつと、愛妃も、あの奥の小部屋に眠っているはず。そう思うと、悲しみと憎悪が交互に湧き出てくる。が、もうすぐで愛妃に逢える。今、玄関のドアの前に立っている私は、この瞬間を、ずっと待ち望んでいた。

しかし、あの女の異常な用心深さと勘の鋭さが、先程から、このドアに合鍵を射し込むのを躊躇させている。ドアの内側に警備保障の防犯ブザーがあるかもしれない。

あれは、そんな女だ。去年、一人暮らしたから、雷と雨風の強い夜が怖いと嘆くときがあった。家族もなく一人で、喫茶スナックを経営していれば、世間からは、きつと小銭を溜め込んでいると思われると心配していた。

それは、殺人犯だから、尚更恐いのだろう。仮に、防犯ブザーが鳴ったとしても、警備保

障が駆けつけるまで、地下室に入るくらい時間はあらず。が、もし、地下室の扉に錠を掛けていたら。違う。違う。自分が恐れているのは、そんなことではない。自分は、本当は、地下室へ入ることに躊躇っている。

自分の心の奥底では、もし、犯人が、あの女でなかったら、もし、地下室で愛妃が見つからなかったら、と慄いている。愛妃を、永久に、ここで見失うことに脅えている。

それでいて、その反面、愛妃は、今もどこかで、きつと生きていると信じ、娘の死を絶対認めたくない気持ち、心の隅に鉄の盾のように立ちちはだかっている。

この無限問答は、今まで、心の片隅で何度繰り返した事か。そんなとき、いつも、愛妃の姿が、シャボン玉のように弾けては飛んで、いつの間にか、淡く消えてしまう。

そうして、はっと我に返った私は、終には、ぼんやりして涙が溢れてしまう。

……愛妃がいなくなってからというもの、毎夜、泣きながら寝てしまう日々の繰り返しのなかで、ぽっかり空いた心に、あの女への疑いだけが増幅して埋まり、自分の容貌は黒ずみ、悲しいくらいに醜く衰えた。

以前、私に男女の秘密事を、耳元で小さな声で甘く囁いて、不意にキスを奪ったあの男でさえ、今は私に顔を背ける。

或るとき、町で偶然、彼を見つけたとき、私は、無意識のうちに、男の姿を追っていた。が、物陰に、彼を見失ったとき、慌てた女の未練が悲しかった。男の煙草を鉄む二本の指と手の甲の筋を擦る妄想に弄ばれた過去を、惨めに思い出していた。愛妃が消息不明にならなければ、あの夜、あの男との逢瀬のなかで、女の愛欲を満たすことができたものを。それが口惜しいと嘆いても、夜更けになれば、そんな男のことは忘れてしまう。

コンビニの若い女子店員に会って以来、良心は、悪魔に身売りするかのごとく、唯、疑心と憎悪と殺意だけが一人歩きして、あの女を殺す瞬間の映像だけが鮮明になっていった。夜明け前は、瞼が痙攣して眠れない。

朝、起きて、鏡を恐る恐る覗いて、人の顔をしているか確かめる。それでも、夜が、また訪れると、何故か良心の呵責は消え失せ、また、それらが顔を出し、朝を迎える。

が、そんな自分自身を、恐ろしいとも悲しいとも思いこそすれ、自分を、無駄に励ましなからも、夜毎、復讐を夢見て生きてきた。

……あの女は、刑事に、自分は、自転車に乗れないと確かに言った。それも、私の目の前で。あの瞬間に、小さな疑いは芽生えた。

その疑いは、暗黒の復讐の炎となって、私の心を、地獄の業火で燃やし、ついに灰塵に帰してしまった。その灰は、渦を巻いて、夢の中に現れ、私は、何度も何度も、あの地下室を彷徨し、愛妃を探した。が、いつも、あの奥のドアは、固く閉ざされ、開けることができなかつた。夜、ふと目が覚めると、枕元に、幾つもの得体の知れない、ぼやけた黒い顔が、口をぎこちなくパクパクさせている。

ああ、私は、既に、この暗黒の奴隷となって、魂は、どこか奈落の底を蠢いているようだ。僅かの良心の叫びも消えうせてしまった。

今、このドアの前に立っている女は、誰だろうか？ 私だろうか？ 私は、人の顔をしていないのだろうか？

誰かが、私の背中を押している。その合鍵を、早く鍵穴に入れて、右に回せと声がある。

《鍵を鍵穴に入れる音。錠前が外れる音》

ふふっ馬鹿な女。防犯ブザーは鳴らない。
ようやく、家の中に入った。

《懐中電灯をつける》

そうそう、この玄関から、夢の最終章は始まるのだった。あの女が、名古屋から帰って、玄関を開けたら、大切なPHブランドのTシャツが、玄関マットに落ちている。

あの女は、狂ったように叫びながら、箆笥部屋に走る。箆笥部屋のドアは、開かれています。部屋の床には、スーツが乱雑に散らばっているのを、あの女は、走りながら見る。

あの女は、いよいよ錯乱して、悲鳴を上げながら、勢いよく部屋に入ろうとする。

……箆笥部屋の入り口のこの辺に、包丁が宙に浮くことになるわ。あの女の首の高さに。フツッ、この包丁の先に穴を開けて、バランスをとるのには、結構苦勞したのよ。それから、部屋に入ろうとするその瞬間、包丁は、あの女の首の頸動脈を鋭く掻き切って、血が、白壁にぱつと飛び散る。

ああ、これは、何度も何度も、繰り返す夢の中でみた光景。この光景の中に、私は、安堵して、眠ることができた。

それにしても、なんて、あの女は、衣装持ちなのだろう。箆笥には、数百枚のTシャツが、端を揃えて綺麗に畳んである。

PHのスーツも数え切れないくらいある。

綿ボイルの黒のスカートには、鮮やかな小花柄がプリントされ、ウエストに、きめ細かいタック、裾に、美しく繊細な梯子レースとフリル。あの女は、このような美しい衣装に囲まれて、日々幸福に生きて、美意識を高め、独自の美的感覚を身につけていた。

美しい髪のある女は、美白の肌にも憧れ、いつも、カウンター内で、熱心にコスメテックの雑誌を読み耽っていた。

……エリカは、高校生の頃、小足のロマンスシューズに目覚め、数年後、AAのファッション雑誌で、初めてPHの店の記事を見つけた。名古屋から原宿に駆けつけて、探し当てた店は、一間の間口の小さな店だった。

その店には、彫りの深いドイツ人の女性が、一人店番をしていた。店内に、ワンピースが、壁に、三四点ディスプレイされていて、ウエスト58cmのスカートが、何点かハンガーに掛けてあった。床の隅には、23cmの靴が、何気なく置かれていた。

そのとき、エリカは、四万円のワンピースを買った。その瞬間、エリカは、ある感覚に、スイッチが入った。それ以後、他人の感情の機微など知らずに、いや、知ろうとせずに、己の美意識を最高の価値観として、それに不釣り合いのものを強く排除して傲慢に生きてきた。が、歳を重ねるうちに、己の老いの兆候に怯え、怯えれば怯えるほど、その反面、美的感覚は研ぎ澄まされていった。

でも、その苦しみも、明日で最後。

あら、いつの間にか、床が、切り刻んだ服でいっぱい。

……あの女は、この有様をしつかり眼に焼き付けながら死ぬ。

それにしても、今、エリカは、名古屋にいたはずなのに、この家中、あの女の気配でいっぱい。気分が悪い。反吐が出そうだ。

何故か、店に通じるこのドアの陰に、アレがいるような気がしてならない。

エリカは、毎日、カウンター内にある椅子に座って客を待っていた。その椅子の下に、地下室の入口がある。一年前のあの事件以来、あの女は、一日すら、家を空けなかった。

三十分に一回は、トイレに通う頻尿の女は、何処にも行こうとしなかった。極度に疑り深く、被害妄想癖の女は、どこにも行けなかった。そして、女の口から、以前は、よく自慢をしていた地下室の言葉が、ぶつくり消えてしまった。まるで、禁句のごとく。

私が、何気なく地下室の話をすると、顔の表情が一瞬変わった。そう、まるで、顔に、風が吹いたように。

……愛妃がいるのね。

きつと、地下室の奥の部屋で、箱の中に蹲っている。こう思うと、とめどなく涙が出て止まらない。ああ、赤ん坊の頃の愛妃の姿が、幾重にも重なって思い出される。

でも、ようやく、今、愛妃は、自分の許に戻ってくる。

《女は、ドアを引いた。暗闇に、厨房の臭いが、すうっと、立ち込めた》

ああ、この臭い。この独特な臭いが、私の憎悪を具象化して、夜一人歩きさせた。

この厨房と、シャネルの香水と煙草が混ざった臭いが、あの女の匂い。私が、夢の中で、地下室に来たとき、この厨房の臭いが、地下室にも立ち込めていた。

《女は、暫くの間、懐中電灯で、厨房にあるはずのエリカのチュールサンダルを探していた。しかし、それがないと解かると、今度は、店内のPHのパネルを照らした》

このパネルを、カッターで切り裂いてやるわ。あの女は、この有様を見たら、どう思うだろう？ ……でも、これを、見ることはかなわない。何故って、エリカは、自分の筆筒部屋の前で死ぬのだから。

……ああ、時間だわ。もうこれ以上、時間を引き延ばせない。気が狂いそうだ。この地下室の扉を開けるときが、いよいよ来た。

《女は、厨房の床のマットを剥いだ。地下室の扉が、施錠されてないと解かると、すこし喜ぶ動作をした。女は、ゆっくり扉を持ち上げて、懐中電灯で地下室の階段を照らした》

ああ、暗闇のなかに浮き出るセメントの階段。この情景は、何度も夢に現れた。

懐中電灯の光に、冷たく反射する灰色は、夢にみた色。その階段を下りると、終わりのない雨が階段に降り注ぎ、闇は、更に深まってゆく。

……今、私は、この階段を下りてゆく。

《何処からか、強く窓を叩く音。

女は、驚いて後ろを振り返った。

懐中電灯で、窓を照らすと、そこには、無数の鳥が、不気味な羽根音を鳴らして、窓全体を、振動させながら激しく叩いていた。鳥は、搾り出すような不気味な低い声で鳴っている。

ついに、窓ガラスの一枚が割れて、数羽の鳥が店内に飛び込んできた。鳥は、女を攻撃するかのようになり、一直線に、頭を掠めて飛んだ。

女は、驚愕と恐怖から気が動転し、あろうことか、足を踏み外して、地下室の闇に消え去った》

第三章 エリカの独白

《二階のカーテンの隙間に、人影があった。人影と云っても、夕暮れの暗さに紛れている。その人影は、身動きをせずに、外の様子を窺っていた》

もうすぐで、久美が来る。秋田空港で、私を見送った彼女は、夜が来ると、大手を振って

ここに来る。

あの時、久美は、秋田空港の出発口の柱の陰から、硝子越しにゲートを通る私の姿を、執拗に追っていた。久美は、知らなかったのね。今の最新の携帯電話には、画面が鏡になる機能があるのよ。私は、飛行機には乗らなかった。最初から、飛行機には乗るつもりはなかった。私のボストンバックには、お気に入りのPHスーツが、十一着入っていただけ。一旦、飛行機の座席に着いてから、生理痛と偽ってゲートに戻った。空港のトイレに、ちよつとの間、身を隠してから、自啜して、急いで、タクシーに乗った。途中、高速道路の西目の追い越し車線で、漸く、久美の車を追い越したわ。そのとき、何故か、急に、子供の頃の久美を思い出して胸がいっぱいになった。だから、久美の携帯電話に、何度かメールを送ろうとしたの。が、その度に、トンネルの中で圏外だった。あのときは、久美が、可哀想で、ただ涙が溢れて泣くだけ。何をメールで送ろうとしたのか、今は、思い出せない。後ろを振り返って、久美の車の小さくなっていくヘッドライトを、最後まで、ずっと泣きながら見ていた。

……煉瓦の上に鍵を置いたのは、貴女ね。合鍵を造ったのね。明日の夜、名古屋から帰ってくる予定の私が、家を空けるのは今夜だけ。だから、店の駐車場には鎖を張っておいた。ここへ、久美は、きつと、コンビニの駐車場から暗い空地を歩いてくる。

だけど、ここへ来てはいけないのよ。久美は、愛妃のことは忘れて、これからの自分の人生を考えなさい。三十過ぎの久美は、まだ若くて美しい。普通に化粧をして、流行りの服を着て笑ったら、きつと、男が振り向いてくれる。そうして、思いがけない楽しい日々が、きつと、また訪れるに違いない。

もし今夜、此処に来なければ、久美の苦しみは、今後次第に薄れていく。それを、私は、強く願っている。

……が、それでいて、生来の自縄自縛から逃れられない私は、ここでこうして、久美を待っている。

ああ、外の間は、容赦なく色濃くなっていく。久美は、昔から、夕暮れ時が好きだった。宵闇が、そつと落ちる静けさを愛した彼女は、物静かで、どこか愁いを帯び、はつとする美しさで世間の男を驚かした。

そう、あの時、男と店のカウンターで唇を重ねているのを垣間見た時、驚きと嫉妬心で気が狂いそうだった。久美は、恥じらいながらも、嬉しそうに男に体を預けていた。

あの男は、私の愛人だったのよ。苦労して、私の男になつてもらったの。が、いつの間にか、男の心は、私から離れ、久美に乗り換えていた。男は、ゆつたりとした口調で話し、どこか女に夢を見させるような心地良さがあつた。いずれあの男と久美は、愛欲に溺れ、お互いが、セックスに夢中になるはずだった。しかし、あの男だけは、久美には取られなくなつた。ある日、偶然、コンビニで二人が楽しそうに話をしているのを見掛けたとき、私は、心が焼けるほど嫉妬して、久美に殺意を覚えたほどだった。それでいて、無意識の内に、車

の陰に隠れて泣いた自分が、惨めで悲しかった。もし、あの男が欲しければあげてもいい。久美は、あの男が欲しいことはわかってる。私が邪魔なものも知っている。

三十過ぎの女なら、好きな男との楽しいセックスの日々を、夢見ていることも知っている。一人寝るとき、男と会う日を、夢見るように数える、そんな若い頃のように。

私と従妹の久美とは、子供のころから、大の仲良しで、夏休みの午前中は、一緒に、裏の畑の西瓜や苺採りをした。

私は、苺を採るのが上手だった。私の竹の籠は、いつも形がよく、大きな赤い苺で一杯だった。が、反対に、久美の籠には、歪な形の苺で一杯だった。その籠の中に、特に変な形の苺を見付けると、私は、その苺をつかみ取って面白がって笑った。

午後からは、天気が良ければ、一緒に、海やヘルスセンターのプールに泳ぎに行った。

ある日、二人は、プールから帰って来て、縁側で仲良く西瓜を食べた。西瓜を食べ終わってから、私は、ポケットから、お菓子をとり出して、ひとり食べ始めた。そのお菓子は、名古屋から持ってきたものだった。

久美は、そのお菓子が珍しかったのか食べたそうに私を見ていた。しかし、一人っ子で我儘に育った私は、人に物をあげるといふことは、絶対しなかった。それどころか、二歳上の久美には、いつも陰で意地悪をしていた。私は、久美より、ずっと可愛らしい服を、親から着せられていて、それを店で選ぶこともできた。が、久美は、常に、姉のお下がりを着ていた。それを、笑ったこともある。

そのために、日頃から、私の方が、ずっと偉かった。

浜に白旗が揚がって、海に泳ぎに行った帰り、私は、わざと早足で歩いた。

久美は、小走りに私についてくる。久美のゴム単靴は、少し大きくて、カポカポと変な音を立てていた。その音が、やけに耳障りで不快だった。

「エリちゃん、もつとゆつくり歩いて。肩と腕の皮が剥がれて、ひりひりするの」久美は泣き声で言った。

「煩いわね。なによ、こんな皮」

私は、久美の肩の剥げかかっている皮を、無理やり剥がして、その皮を、久美に投げつけてやった。久美は、道端で蹲って泣いていた。「なんで泣くのよ。この泣き虫」

私は、久美が嫌いだっただけではない。いや、逆に大好きだったのだ。久美は、幼少の頃から、睫毛が長く美しい顔をしていた。栗毛の長い髪をして、優しい声をして、すらっとした背格好で足も細く長かった。そんな久美の姿が好きだった。親戚は、久美をいつも、美人で可愛いと褒めた。

しかし、私を褒めるときは、きまつて洋服だった。この頃から、久美に強い嫉妬心を覚えていた。名古屋で、久美が中学のバレー部で活躍していると聞いて、夏休み、秋田の郡大会

に、名古屋から応援に来たことがあった。コートの中の久美は、私の知らない久美だった。久美は、女性的にしなやかに助走して、強いスパイクボールを打っていた。

チームメイトと一緒に小躍りして喜ぶ姿に、私は涙を流したものだ。それ以降、私は、久美を虐めることはしなかった。いや、尊敬の念を抱くようにさえなっていた。

久美は、地元のY高校に進学すると、より美しい女性になっていた。私は、名古屋の女子大学の付属高校に進んで、久美とは、四年くらい会うこともなかった。

その後、久美は、二十三歳で、恋愛して妊娠した。愛妃を生んで、そうして、二十八歳のとき、夫の浮気が原因で離婚した。

離婚したとき、私は、内心手を叩いて喜んだ。久美の不幸は、何故か、とても心地よかった。

去年のお盆過ぎに、久美の実家で三十三年の法事があった。私は、程よい頃、早目に席を立った。私は、気疲れが、強いストレスとなる性質だった。そのとき、愛妃が、玄關に走ってきて

「エリカ姉さん、あとで店に行くから、チョコレート・パフェをご馳走して」と言った。

「いいわよ、三十分後、店においで。一緒に食べよう」と私は言った。

愛妃は、久美によく似ていた。愛妃を見るたび、よく子供のころの久美を思い出した。

子供の頃、私は、久美と近くの熊野神社で、いつも暗くなるまで一緒に遊んだ。

久美とは、笹舟流しや影ふみや高鬼の遊びをした。笹舟流しは、久美は、私には絶対敵わなかった。私のつくる舟は、久美より大きく、転覆もしないで速かった。影ふみは、初めは、私が勝って、最後はスカートの穿いていない久美が勝つのだった。

ある日、二人は、高鬼遊びに夢中になって遊んでいたことがあった。あたりは、既に薄暗くなっていた。久美は、椿の木の上に逃げていた。ずっと鬼の私は、久美を捕まえることができずにいた。私は、以前スカートを、小枝に引っ掛けて切らしたことがあったから、木には、絶対登らなかつた。

久美は、木の上の太い枝に座って、足をぶらぶらしながら、私を見下ろして笑っていた。私は、ついに癩癩をおこして、何か叫んで、久美に石を投げた。石は、不運にも、頭に当たって、久美は木の上で泣き始めた。

そのとき、私は、その夕暮れの暗さのなかで、足元に、何か奇妙な異変を感じた。

そして、足元を見ると、私は三十三匹のがま蛙に丸く囲まれていた。あの瞬間の身の毛もよだつ恐ろしさは、今も忘れることができない。私は、恐怖心から泣き叫んだ。

「久美、助けて。がま蛙に囲まれたの」

「昨日、がま蛙に、大きな石を投げて殺したからよ。仲間が仕返しにきたのよ。一昨日は、

縞蛇も殺したし、エリカは、がま蛙と蛇に殺されるのよ」

久美の気味悪いくらい大人びた低い声が、境内に響いた。私は、その恐怖心から、必死になって、がま蛙を飛び越えて転んで、悲鳴をあげながら実家へ逃げ帰った。

その後、久美は、母親が探しに来るまで、木の上で泣いていたという。

……愛妃は、ちょうど、あの頃の久美と同じ歳になっていた。

あのと、愛妃は、カウンターで私と並んで、チョコレート・パフェを食べていた。

愛妃は、

「お姉さんは、どうして結婚しないの？」と、パフェを食べながら尋ねた。

愛妃にしてみたら、私は、自分の母親と同じような年齢だったから、素朴な疑問だった。

「どうしてかしら、男の人に尋ねてみたいわね」

愛妃は、変な笑い方をした。が、私は、気にもとめないように振舞っていた。

店のドアを叩く音がした。K宅配便の馴染みのドライバーの男だった。表のドアには、準備中の表示があつたが、外から、愛妃の姿を、ドアのガラス越しに見つけたのだった。

ドライバーは、店内に入ると、

「ああ、涼しい」と言って、外の暑さを嘆いた。

私は、愛想よく軽い冗談を言って、アイスクリームを紙コップに入れて、ドライバーにあげた。彼は、大げさに喜んで帰った。

愛妃は、くすくすと笑っていた。

その日は、気温が、三十二度を超える真夏日だった。

あの事件の後、そのドライバーが、私に有利な証言を、警察にしてくれたのだった。

その荷物は、私がインターネット・オークションで落札した品だった。

「愛妃ちゃん、これ、オークションで、二百円で落としたTシャツなのよ。面白いわよ。見てみる？」

「うん。見たい。どんなの？」

私は、透明なガムテープで硬く梱包してある荷物をカーターナイフで開けて、プチプチの袋から品物を取り出した。そのTシャツは、綺麗なパープルの色に、両肩にはファスナーが付いて、身頃の英字ロゴにハートのアップリケが貼り付けてあった。

「いいで、二百円なの」

愛妃は、奇声をあげて驚いていた。

「このパープルの色が絶妙ね。この色でないと、私はだめなのよ。どう、似合う？」

ああ、次の瞬間、愛妃の気味悪いくらい大人びた低い声が聞こえた。それは、あの時の久美の声とまったく同じ声だった。

私の存在を辱め、私の美意識を根底から覆す呪われた言葉が。

「*****」

愛妃は、私を見て笑っていた。

……愛妃の服装は、黄色の水玉柄のシャツブラウスに、水色のキャミソールと裾レースの付いた七分丈のホワイトジーンズ。

私が、それを着ると、ピチピチで窮屈だった。愛妃の白のブリーニハットを深く被って、自転車のペダルを漕いだ。蚶満寺の公衆トイレで、隣人の男の排便音が、終わるのをじっと待っていた。ドアの隙間から、その男を見送り、それから、作業着に着替え、農帽を被って、愛妃のジーンズを、駐車場の車のトランクスに、はみ出すようにして入れた。

その後、裏の農道を通って家に帰った。

警察は、あの時の変態っぽいトイレの隣人を、重要容疑者として捜査し、赤いセダンを探した。私の店には、警察とマスコミと一般客が、まるで荒波のように、絶え間なく押し寄せた。が、誰一人、私を疑うことをしなかった。

私にサインを強請る客もいるくらいだった。マスコミ連中は、私の店で、無駄に時間を潰し、アイスコーヒーを飲みながら、面白可笑しく事件の真相を推理した。

そして、カウンターの刑事が、偶に一言二言、私に話かけると、店内は、一斉にシーンとなるのだった。私の店の前で、報道キャスターが、マイクを片手に汗だくになってする迫真のライブ報道を、店内のテレビで観ていたときが最高に面白かった。

しかし、二週間も経つと、潮がすつと引くように、マスコミは去り、蚶満寺周辺は、もとの静けさに戻った。と、同時に、私の頭に出ていた無数のイボも消えた。

事件から、二ヶ月が過ぎると、久美の容色が徐々に醜くなっていった。

私は、それを観察するのが、その頃の楽しみになっていた。顔色は、浅黒く弛んで、目尻と頬骨に、小さなシミを発見したときは、背を向け屈んで笑った。が、そんな楽しい時も、長く続かなかった。十一月になると、久美は、毎日のように、店にコーヒーを飲みにくるようになった。

最初の頃は、久美が、私を疑っていることなど思いもしなかったが、長い冬が終わり、春が来て、ある日のこと。久美は、会社の観桜会の帰りとか言っていたが、珍しく夜、店に来て、ビールを飲んだ日があった。

その夜、久美は、私の顔色を、何気なく窺いながら、地下室のことを、何度も執拗に尋ねた。そして、久美は、帰り際に、外から窓越しに、私をじっと覗いていた。外灯の光の反射で、偶然窓に映ったその顔には、憎悪と猜疑心がありありと表れていた。身震いする一瞬だった。

そのとき、私は、凍ったように身動きできなかつた。久美が帰ってから、気を落ち着かせて、どうしてばれたのだろうと考えた。

……私は、駐車場に佇み、夜桜を観ながら、子供の頃に体験した久美の恐ろしさを思い出していた。

あれは、小学校六年生の夏休み。町内の子供会のお盆行事。それは、蚶満寺で行われた肝試しでの出来事だった。

決まりは、山門を出て、夜泣きの椿の下を通り、墓場の水子地蔵の間の太鼓橋を渡る。神功皇后の袖掛けの松の下には、懐中電燈に照らされた砂の入ったバケツが置いてあり、各々の名入れの棒を、その中に刺してもどつてくる。女子の参加は、六年生のみで、久美だけだった。私は、特別参加だった。

あの晩は、風がなく、月が、薄い雲に入って、赤々とぼんやり、大きく夜空に浮いていた。

蚶満寺の 和尚さんが

月の下で 穴を掘りました

鼠が出て 鼻が飛んで

墓に影がさしたら

ジャンケンポン

子供達は、歌をうたって順番を決めた。

私が、最後で、久美は、私の前だった。

最後の私が、懐中電燈を持ち帰ることになっていた。

皆、惣助翁彰徳碑前の石段に座って、順番を待っていた。出発して、後ろ姿が、山門の闇に消えたら、その後、一同は絶対に山門を見ない。山門内には、恐ろしい形相の二尊の金剛力士像が立っている。山門の暗闇に潜む靈気に、恐怖で背筋が凍りつくのを、皆は、一箇所が集まって耐えていた。

男子は、帰りが早い。必ず走ってくる。

息を切らして、なかには、膝小僧をさすっている子や頭を押さえている子もいる。

おそらく、太鼓橋や石畳に躓いて転んだり、夜泣きの椿の支柱に頭をぶつけたりしたのであろう。ある男子は、バケツの周辺に、棒が投げられてあつたと震える声で訴えていた。

久美が、帰ってきたとき、私は、

「棒を、ちゃんとバケツに刺してきたか」と尋ねた。久美は、にこにこ頷いた。次は、私の番だったが、他の子供たちは、既に、帰り支度を始めていた。バケツと棒を集めにいくのは、明日の朝、ラジオ体操の終了後などと話していた。子供たちは、一刻も早く町内会館に戻って、西瓜を食べたいのだった。

……墓の石畳を外れないように、ゆっくり歩いた。ヒタヒタと足音が、後ろの闇から聞こえてくる。歩を止めると、足音も止んだ。幽霊の足音のように聞こえた。

夜泣きの椿を、左に曲がると、そこは、月明かりでも、暗闇の色が濃くなっていた。そこから、まっすぐ行って、右に直角に曲がり、次は、二十八歩目で左に直角に曲がる。そこは、ちょうど、大木の梢の下で、真っ暗だった。その角から、左を向くのが怖かった。曲がってから、すこし行くと、頭のない水子地蔵が、両端に二体ある。横を向くと、水子地蔵に顔があるような気がして、首が緊張した。その二体の水子地蔵の間を通り過ぎてから、小さな太鼓橋を渡る。そして、橋を渡り終えてから、また一步踏み出すのが、底知れぬ恐怖だった。石畳が、大きく裂けて、闇が口を開けているように思えた。

橋を渡って、すこし行くと、前方の袖掛けの松あたりに、バケツを照らしている懐中電燈の光が見えるはずだった。が、そこにあるのは、漆黒の闇と深い静寂だけだった。

その恐ろしさに、いつそのこと、そこで引き返そうと思ったが、後ろを振り返ると、ひたひたと音を出す幽霊と水子地蔵が、後ろの正面に立っている。前方より後方が恐かった。

それに、バケツの周辺には、きつと懐中電燈が落ちていて、スイッチを押したら、また灯りが点くかもしれないと考えた。

だから、勇気を出して前に進んだ。

ゆっくり前に進んだら、足が、バケツに当たって、大きな音を出した。悲鳴をあげた。

気は動転して、その勢いで思いつき棒を刺した。走って逃げようとした瞬間、誰かにスカート裾を強く引っ張られた。

……記憶は、そこまでだった。

気がついたときは、翌日の昼頃で、病院のベッドのなかだった。午後は、自宅で横になっていた。二三日放心状態が続いたという。

久美が、お見舞いに来て、

「エリちゃんの棒は、スカートの生地を突き抜けて、蟬穴に刺さっていたの。荒屋の誠治郎ちゃんが、助けてくれたのよ」と言った。

私は、あのとときの事を、おぼろげに覚えていた。スカートを強く引っ張られて、後ろを反射的に振り返ったとき、瞬間的に目を見開いた。私のスカートを掴んでいたのは、紛れもなく、久美だった。久美の手が、白く長く伸びていた。

※※※

……なんの音だろう。一階が妙に騒がしい。何かが、落ちてきた。

《久美が、足を踏み外して、地下室に落ちてから、一階では、凄まじい鳥の鳴き声と羽根音が空気を震わしていた。

一羽の鳥が、地下室に紛れ込んで、壁にぶつかりながら飛んでいた。

が、いつの間にか、羽根音が止んで、地下室には、重苦しい闇があった。

久美は、階段の踊り場に倒れていた。

手摺のないセメントの階段の踊り場に、体半分が床に落ちかけて、逆さまに仰向けになっていた。久美の長い髪が階段に末広がりになっている。

暫くして、久美は、意識を取り戻したとき、腰に、ひどい痛みを覚えた。

そして、自分は、厨房の階段から、地下へ落ちたことを思い出した。

しかし、この危険な状況に気づくには、そう時間がかからなかった。下手に動くと、床に落ちそうだった。

それに、拙い事に、腰だけではなく、左足も思うように動かなかった。

右手で懐中電灯を探したが、見つからなかった。暫く、沈黙が続いた。

そのあと、女は、両手で体を支えながら、仰向けのまま、ゆっくり一段ずつ滑るように下りていった。自分の長い髪が、背中に溜まって、一段下りるたびに、髪が引つ張られ、頭皮に激痛が走った》

……やっと、頭が、床に着いたわ。

なんて、私はついていないのだろう。

恐ろしい、恐ろしい。あの鳥の集団は、私を殺そうとしたのだろうか？ 一階からは、も

う、鳥の鳴き声が、聞こえてこない。

鳥は、去ったようだ。しかし、この状態をどうしたらよいだろう。頭が痛く、息も苦しい。

背骨は折れていないようだが、腰は、痛くて思うように動かない。思い切って、足を床に落としてみたらどうだろう？

床には、何が置いてあるかはわからないが、落ちたとしても三段くらいの高さだ。

《久美は、階段から、足を落とすと、体は、捻られるように床に落ちた。

悲鳴があがった。

また、暫く、沈黙が続いた》

痛い、痛い。肋骨が、折れたように痛い。

《久美は、うつ伏せの状態で体を動かすことができなかった。手で頭を支えた、そのとき、小さな光が眼に入った》

あの光は、なんだろう。地下室の奥でチカチカと光がゆれている。

《久美は、眼を凝らした》

奥の部屋のドアが空いているのだわ。

ドアの向こうから、光が洩れている。

……その部屋に、愛妃がいる。

《久美は、渾身の力を出して、うつ伏せで這っていった。漸く、ドアに辿り着くと、小部屋の奥には、白いレースのカーテンがあった。

そのカーテンの向こうで、その光は瞬いていた。久美は、ドアノブにつかまって、なんとか立つことができた。

そして、そこから、小部屋の中を注意深く覗きこんだ。

光は、小さな電燈のようだった。

電燈は、光るたびに、光の筋が、カーテンレースに伸びては消えた。

久美は、暫くの間、カーテンの側に立ち尽くしていた。が、終に、カーテンを両手で開いた。小さな電燈の下には、電気のスィッチがあった。そのスィッチを押すと、天井付近のスポットライトが、薄暗く点燈した。そこには、観音開きの木製のケースが大小二つ置いてあった。

……やがて、ケースを開ける音。

地下室に、地を這うような嗚咽の音が響いた。

そうして、あるうことか、小部屋のドアが、勢いよく閉まる轟音が、地下室を激しく振動させた。次に、カギを掛ける高い金属音。

そのあと、地下室には、エリカの高笑いの声が反響した。エリカは、ドアの陰に隠れていたのだった》

「引っ掛った。引っ掛った。久美が、引っ掛った」

《エリカは、手を叩き、小躍りして、笑いながら、胃の中のものを吐いた》

「傑作。傑作だわ。もう可笑しくて耐えられない。一体何が、一階から落ちて来たと思ったわ。久美だと判ったら、腹を抱えて噴出しそうだった。ああ、苦しい」

《エリカは、ドアを叩きながら笑った。
が、久美の反応がないとみると、エリカは、ドアに耳をあてて、中の様子を窺いはじめた。》

小部屋の中からは、低い嗚咽の音が聞こえていた。エリカは、また笑いながら階段を駆け上がって、電気のスイッチを入れた。電球は一瞬光って切れた。

エリカは、今度は、ゆっくり階段をおりて、ワインセラーの上の小さな赤い電球を点けて、小部屋のドアの前に、仁王立ちした。

そこには、この世のものとは思えないような、恐ろしげな阿修羅の女がいた》

「愛妃が悪いのよ。」

私に言っただけじゃないことを言ったのよ。これも、久美の教育が悪かったからよ。

昔の妖怪漫画の事を、私に言ったのよ。私が大学を卒業する年、バイト先のクラブに来た客を、名鉄のプラットホームから突き落とすことだって、あの妖怪漫画が悪いのよ。死んだわよ。電車に轢かれて《笑》酔っ払いの死に顔が、可笑しかったわ《笑》人を馬鹿にするときは、命をかけたといけないわ」

《エリカは、煙草を取り出して、ライターで火を点けた。火炎のボウツという音がして、女のサンダルのラメがチカチカ光った。

小部屋の中で、久美が、何かぼそぼそと言った》

「愛妃は、私にこう言ったのよ。」

『砂かけ婆には似合わない』

呪われた十三語。愛妃は、花瓶で殴って殺したわ《笑》久美には、あの男は、あげないわよ。久美も、ここで死ぬのよ。娘と同じ命日ってことよ」

《エリカは、また狂った様に笑った。

その後、沈黙が続いた。

沈黙は、地下室を、臙脂の光で充滿させた。暫くして、小部屋の中から、何か音がした。エリカは、ドアに耳をあてて、その音を聞こうとした。

その音は、携帯電話の着信音だった。

また、鳥が一羽、地下室に紛れ込んできた。鳥は、辺りかまわず壁や物にぶつかっては、バサバサと煩く羽音を鳴らした……》